

花が咲く、その先に



著者プロフィール

チコママ&ぺろまま

ワンコ友達を通じて知り合った二人です。

ブログ、書籍出版、作品展、絵本の発行など其々で

「犬達の幸せのために」と活動してきましたが

今回、お互いの愛犬の旅立ちを機に

一緒に一つの作品を作ることになりました。

「犬と心を通わせることの幸せ。」

それをこの作品で少しでも感じていただければ幸いです。

全ての犬と飼い主さんが幸せでありますように。

ペットロスで苦しむ方の心に、少しでも光が差しますように。

そして、この世から「ペットの殺処分」がなくなりますように。

それが私たち、そして今は空の上にいる

二人の愛犬の願いです。

■画像・文■

チコママ

ブログ「柴犬のチコ。」にて8年間、愛犬チコとの生活を綴ってました。

2014年4月、チコが旅立った後も心は共に。

現在はペット情報サイトPECOにて公式ブログを運営。

全てのワンコ達の幸せを願い、日々更新しております。

ブログ

[「柴犬のチコ。」](#)

[「PECOいぬ部 Byチコママ」](#)

■絵本■

ぺろまま

2009年から始めたブログをきっかけに「殺処分」の現実を知りました。

それ以来、独学でイラストを勉強し、優しい言葉とイラストで

「子供でも見れる殺処分問題」をテーマに殺処分の現実を訴える活動を

続けています。

ブログ

[「心がほっこりするブログ」](#)

[「ぺろままのほっこり工房」](#)

この本は、最愛のチョコと別れてから保護犬ひなを迎えるまでの私の心情を綴ったものです。

私はチョコと暮らしていた頃からよく、友人たちに「あなたはチョコがいなくなったら、生きていけるのか」と心配されていました。そのくらい、チョコだけを見て生きていました。

そして私はチョコを失った後、周りが心配していた通りひどいペットロス状態に陥りました。それは想像していたよりも、はるかに苦しくどんどん壊れていく自身の心と体をもう一人の自分が「もう、どうでもいい」と半ば諦めて眺めている様な感覚でした。

そんな私が何故、前に進めたのか。どうして「保護犬ひな」という存在と、再び人生を共にする気になったのか。ありのままを綴ってみました。

苦しみから脱するキッカケも、命に対する考えも人それぞれ、みんな異なると思います。そんな中、この本が前にすすむ為の「小さな糸口」になれば幸いです。

拙い文章ではありますがどうか最後までお付き合いください。

チョコママ



- さようなら お母さんのチョコ
- あなたが帰って来てくれる日まで
- 醜い、心
- 友人の、優しい嘘
- あなたに、届きますように
- お母さんと、ワンコ
- 夢の中で
- あなたが忘れてしまっても
- 幸せの、種
- 黄色いバンダナ
- いつか、保護犬を
- あの子を、見付ける日まで
- 初対面の日
- チョコが教えてくれる
- お迎えの日
- 「ひな」という名前
- ひな、諦めないで
- ゆっくり、ゆっくりと
- この子は、保護犬です
- 私の、幸せ
- もう一度、桜を
- 私の愛おしい2人の子達へ
- 花が咲く、その先に
- おわりに

- 保護犬とは
- 動物愛護センターとは
- 預かりボランティアとは
- 保護犬ひなと暮らして



さようなら、お母さんのチコ。

2014年4月4日

最愛のチコがお空へと旅立った。

私の腕の中で、私の声を聴きながら
手の届かない場所へ、行ってしまった



チコ、あなたは私の全てでした。

あなたの喜びが、私の喜び。

あなたの笑顔が、私の幸せ。

私の元で、何の疑いや不安も抱くことなく
毎日をイキイキと過ごすその姿は本当に美しくて
私の全てを投げ打ってでも守りたい宝物でした。

あなたの存在そのものが、私の生き甲斐でした。

だけど、私がどんなに大切に思っていたても

「病気」には勝つことができませんでした。

泣いて縋っても、あなたの旅立ちを止める事はできなかった。

あなたの瞳の光が消えた瞬間

私の心の「灯」も消えてしまった。

だけど、チコ。

お母さんには一つだけ、希望の光があります。

今、この辛さを乗り越えさえすれば

「チコは必ず生まれ変わって帰って来てくれる」

という希望です。

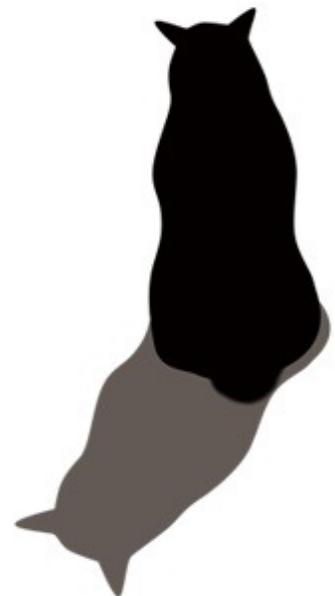
だって、お母さんは言い聞かせたから。

旅立ちの日、あなたを腕に抱いたまま大きな鏡の前に立ち

「あれが、チコを抱いているのがお母さんよ。しっかり覚えていてね。

そして生まれ変わったら必ず見付けてね。

もう一度、お母さんの子供になってね。約束よ。」って。



だから私たちは、また会える。

絶対に、絶対に、会える。

その日まで進もう。

綺麗な景色も、美味しい食事も、いらない。

あなたのいない世界で、楽しみや喜びなんて

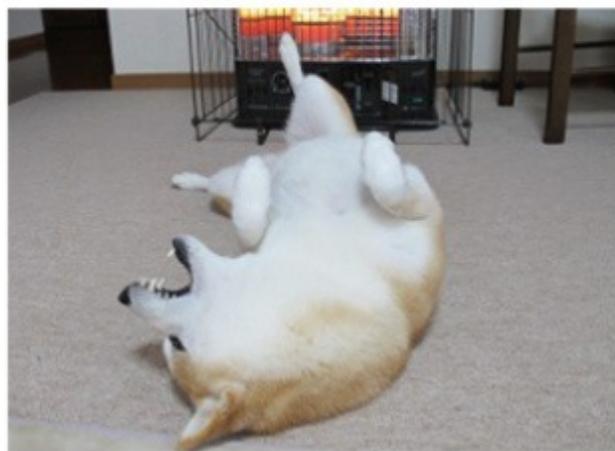
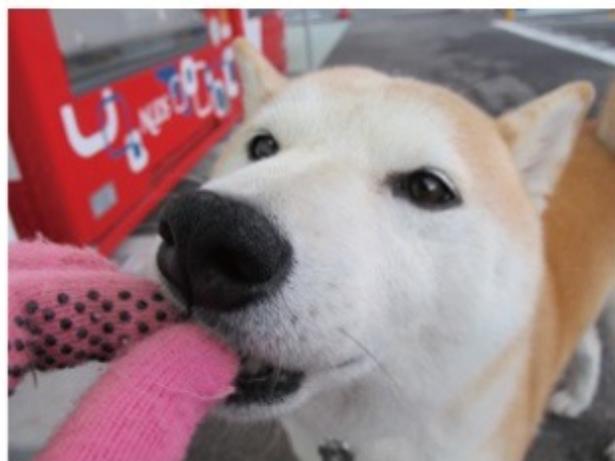
私には、必要ない。

チコ、あなたと会えるその日まで

心をカラッポにして進んでいこう。

何も考えず、何も感じることもなく

ただひたすらに、歯を食いしばりながら



チョコがいた頃は、あんなに明るく眩しかった外の世界が
今は、怖くてたまらない。

周りを見渡せば、むかしと変わらない景色が広がっているのに
その中で「あなただけがいない」現実を、改めて突き付けられる気がして。

でもね、チョコ。

本当に怖かったのは、近所のワンコさん達に遭遇する事。
チョコはもういないのに、この土を踏むことさえ出来ないのに
他の子達が楽しそうにママとお散歩している姿を見るのが
とてつもなく苦しい。

どうしてチョコが。

なぜ、チョコちゃんだけが。

つい、そう思ってしまふ。

チョコ。

お母さん、醜いでしょう。汚いでしょう。

あなたが澄んだ瞳で見上げてくれた

あの頃の「お母さん」は、もういないよ。

いるのは、孤独と絶望に苦しむ

醜い心の私だけ。

人に会うのが、こわい。

犬たちに会うのが、こわい。

心の醜さを見抜かれるのが、こわい。

だから私は部屋に閉じこもる。

あなたの香りが辛うじて残っている部屋で

あなたの毛布や首輪を抱きしめながら。



「何も感じず何も考えない、カラッポな毎日」

そんな日々を過ごしていた私の元に

仲の良いワンコ友達から連絡がきた。

「ワンコのお散歩、一人では大変だから付き合っ」の事。

その友達は産後間もなかったし、ワンコも2匹いたので

確かに大変だなあと思い、私は喜んで引き受けた。

あの人となら楽しいオシャベリが出来るかもしれないと思ったし

何よりチョコとも仲が良かった、ワンコ達に会いたいという

気持ちもあったから。

もうワンコとは関わりたくないと思うのも

やっぱりワンコに触れたいと思うのも。

どちらも私の、偽りない気持ちだった。

歩いたのは、チョコともよく散歩した大きな池のある公園。

友人は私にも片方のリードを任せてくれた。

久々に感じる、リードの手応え。

目の前で楽しそうに弾む、ワンコの可愛いお尻。

最初、ほんの少しだけ胸がチクリとしたけれど

気付くと私は、ワンコとの散歩に夢中になっていた。

そっちに行ったら危ないよ。

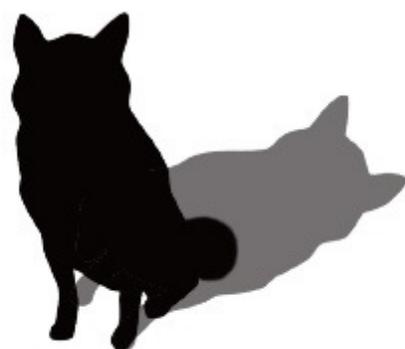
ほら、それ触ったらバッチイよ。

楽しいね、空気が気持ちいいね。

チョコにそうしていた様に話しかけ

ワンコがケガをしない様に気をつけ

広い芝生広場では、一緒に走った。



こんなに自然に笑ったの、久々だった。

「私は、やっぱり犬が大好き」

そう思える自分が嬉しく、心からホッとした。

どんなに墮ちても私は、犬達への愛情を失ってはいなかった。

チョコと同じように、この子達を慈しんでいたあの頃の心はちゃんと私の中に残っていたんだ……。

「助かったよ。また付き合ってね」

別れ際、そう言った友達に私は二つ返事をした。

その後も、何度も散歩に誘ってくれた友達。

「一人だと大変だから」と毎回、言うけれど

そのうち私は、それが友人の優しいウソである事に気付き始めた。

赤ちゃんはお家でパパと留守番だし

ワンコ2匹とのお散歩なんて、今まで数年間やってきた人だから。

「もっと外に出なさいよ」

「犬とまた触れ合えば良いじゃない」

最初からそう言われたら、私はきっと遠慮したと思う。

そんな私の心を分かって、友人は敢えて

「困ってるから力を貸して？」という形で私を誘い出してくれたのだ。

絶望的な喪失感も、犬と触れ合うのを恐れていた心も

全てを理解してくれた上での「優しさ」に、私は心底救われた。

友人のウソに気付いた後も私は

何度も「散歩のお手伝い」をさせてもらった。

あんなに怖かった外の世界が、ワンコとの触れ合いが

いつの間にか、心に明るい光を刺すようになっていくのが自分でも分かった。

チコ。

心の中に作っていた

「あなただけを想って過ごす、一人ぼっちの部屋」を抜け出すのには
すごく勇気が必要だったけど

あなたが残してくれた優しい友達が
お母さんに手を差し伸べてくれたよ。

思い切って一步踏み出した世界は

以前と何ら変わらず優しくて

ワンコさん達は最高に愛らしかった。

あなたが残してくれた世界は温かい。

だから、お母さんは寂しいけど幸せです。

隣にあなたの姿がないことが

とても心細いけれど

また、もう一度

歩き出してみようかな。



あなたに、届きますように

友達に背中を押された事をキッカケに
私は一人でも、近所を散歩するようになった。

チコと9年間歩いた、あの道を。

周りの景色は以前と何一つ変わらないのに
私の横にあるはずの、チコの姿だけが見えない事が
悲しくて切なくてたまらなかったけど
私はずっとずっと、心の中で願いながら歩いた。

あの子が大好きだったこの景色が
私の目を通して、お空の上に届きますように。

もう二度と一緒に歩くことが叶わないのなら
せめてこの空気感、香りだけでも
あの子に届けられますようにと。



チコちゃん。

お母さんが見るもの、感じるものを
全て受け取ってね。

こうしてあなたを想いながら歩いていると
9年前を思い出す。

まだお散歩デビュー前の小さなあなたに
少しでも外の空気を感じて欲しくて
お母さんはあなたを胸に抱いて、ここを歩いていたんだよ。

「ほら、あれが鳥さんよ」

「あそこに綺麗なお花が咲いてるね」

「もう少ししたら、ここをお母さんと歩こうね。楽しみね」

私が話しかける度にキョトンと見上げてくるあなたが
可愛くて、愛おしくてたまらなかった。

チコ。

ここは、あの頃と何も変わってない。
二人で一緒に歩いた日々と全く同じ
優しくて温かい場所だよ。

だからお母さんは、めいっぱい感じよう。
もっともっと外に出て、体中で感じよう。
お空のあなたに、この景色を届けられるように。



私が徐々に外に出る様になったのを知って
沢山のワンコ友達が私を誘い出してくれる様になった。

チコはもういないのに
「一緒に散歩しようよ」と、当然のようにワンコ同伴でやって来る
友達の存在が本当に嬉しかった。

一人で現れた私を見て、キョロキョロと辺りを見回し
チコの姿を探すワンコの姿に切なくなる事もあったけど
変わらず私に甘えて来てくれるのが可愛くて仕方なかった。

そして何より。
私とどんなに楽しく遊んでも最終的には
「自分のお母さん」のところに戻り、まったり甘える
ワンコ達の姿が愛おしく、心から癒された。

それは
お母さんに、ピッタリと寄せるその体も
信頼しきった瞳で見上げる、そのお顔も。
かつて、チコが私にくれたものと同じだったから。

「幸せに暮らしていた頃のチコと私の姿」を
客観的に見せてもらっている気がして
すごく心が救われた。



チコ。

私たち、こんなに幸せだったんだね。

毎日、一緒にたくさん笑ったよね。

心を通わせ合ったものね。

なのにお母さんったら

悲しい場面だけを強く頭に残しちゃって。

二人で過ごした日々がどんなに幸せだったか

忘れてしまいそうになっていたけど

チコのお友達が思い出させてくれたよ。

チコ。お母さんは、もう二度と

あなたを「可哀想だった」なんて言わないね。

あなたが生きた時間を

「たった9年しか」とも言わない。

あなたと過ごした時間は、年数なんかで表せないほど

濃厚で、楽しく幸せだったから。

だからこれからは、こう言うね。

チコちゃん。

「9年間も」一緒にいてくれて、ありがとう



私はチコの夢を見る。

まだ幼さが残るチコと、雪遊びをする夢。

辺りは一面の銀世界で。

チコは、初めて見る雪が怖いのか固まって動かない。

そんなチコを私は大声で呼ぶ。

「チコ、おいでー！」

真っ白で音ひとつしない世界に、チコと私二人きり。

思いきり呼ぶ声さえも、積もった雪に吸い込まれていくようで

ポツンと立ったチコの姿が心細げに見える。

「チコ、大丈夫よ。お母さんのところにおいで！」

私の声に、チコがおそるおそる一步を踏み出す。

「おいで、ほら。こっちよ！」

チコがゆっくり歩きだす。

「お母さんのところに、おいで！」

チコがこちらに向かって駆け出す。

雪を蹴散らしながら、私に向かって真っすぐに。

両手を広げて待つ私の胸にチコが飛び込んでくる。

その勢いで、二人一緒に雪の上に倒れむ。

勢いよく駆け寄って来たチコに押され

草花いっぱいの野原にふたり倒れた

いつかの散歩の日のように。



全身で受け止めたチコの体を
私はギュウッと抱き締める。

これでもう、二度と離れ離れにならずに済むと
安堵しながら。

そんな幸せな夢を、見た。



「チコの生まれ変わり」と出会う事だけを
心の糧にしながら進んできたけれど。

いつの頃からか私は思う様になっていました。
「チコ、もう生まれ変わらなくていいよ」って。

チコは「9年」と言う生涯を立派に生き抜き
今は苦しみも痛みもない、とても温かな場所
お友達と楽しく遊びながら過ごしている。

そんなチコが、私なんかのために降りて来ることない。
そう思うようになったのです。

それにチコは私に、こんなにも沢山の「幸せ」を残してくれた。
それで十分。

私は、これからも生きていける。

チコ、お空の上は楽しいですか？
大好きなおやつ、食べてますか。
お友達とは仲良く遊べていますか？

お母さんは、大丈夫。
チコのおかげで、温かな毎日を過ごせています。
だから、お母さんの事は心配しなくていいのよ。

チコ、お母さんの事を思い出して寂しくなっちゃう様なら
もう忘れてしまいなさい。

ひたすら楽しく、めいっぱい楽しく過ごしなさい。

あなたの幸せが、今もお母さんの幸せなのよ。



あなたがお母さんを忘れてしまっても大丈夫。

いつか、ずっと先

再び出会う世界があるのなら

その時は必ず、お母さんがあなたを見付ける。

ぜったい、ぜったい、見付けてみせるから。

あの日、鏡の前で交わした約束とは

逆になっちゃうけど・・・。

チョコ。

その時は私を、またあなたのお母さんにしてちょうだいね。

一からまた「お母さん」させてね。

やくそくよ。



あなたが結んでくれた、沢山の温かい御縁。
私にまで癒しと笑顔をくれる、可愛いワンコ友達。
そして、私の中にしっかりと根付いた犬を愛する心。

それらは、チョコ。
あなたが私に残してくれた「宝物」です。

お母さんは最近、思うのです。
あなたは、自分が先に旅立つことを知っていて
私にこんなに沢山の「宝物」を残してくれたんじゃないかって。
一人ぼっちになったお母さんが
寂しさや悲しさにめげず、再び歩き出せるように。

お母さんは今、あなたに導かれながら
歩いている。
あなたが、お母さんの道に蒔いてくれた「幸せの種」は
私が一步踏み出すたびに、芽を出し花を咲かせる。

チョコちゃん。
あなたを失い、一人で歩く道は寂しく心細いけど大丈夫。
私が迷わない様に、道を踏み外さない様に
あなたが咲かせた花が、いつも足元を照らしてくれるから。

お母さんは歩いて行ける。
これからも、自分の道を。



チコ。

時間が流れるごとに

「あなたと過ごした日々」は遠く、遠くなっていく。

あなたが使っていた毛布から残り香が消えて

衣替えするたびに出てきていた抜け毛が見付からなくなって

そうやって、あなたの気配は消えていく。

だけどそれは

あなたとの「さようなら」ではなく

二人の絆が新たな形で結ばれていくという事なのよね。

もう体に触れる事ができないとか

抱き締める事もできないとか

そんな事で切れてしまう

チコとお母さんじゃないものね。

この世で過ごした9年より

今の私達は、より強く繋がっている。

もう誰も、時間の流れさえも

私達を引き離す事はできない。

永遠に。



チョコが旅立って2度目のクリスマス。

遠方に住む友達から小包が届いた。

開けてみると中身は

とっても可愛いサクランボ柄のバンダナ。

チョコの病気と旅立ち知らなかった友達が

クリスマスプレゼントにと手作りしてくれたものだった。

添えられていた手紙には

「チョコたんの具合も知らず作ったのですが、

どうしてもチョコママに送りたいくて。

いつか出会いがあれば、そのワンちゃんにつけてあげてください」

と書いてあって……。

私は、久々に声を出して泣いた。

可愛いサクランボ、どんなにチョコに似合っただろう……。

その姿をもう見る事、見せる事ができない切なさ。

お友達にそんな想いをさせてしまった、申し訳なさ。

たまらない気持ちになったけど

でも、最後の一文の

「いつか出会いがあったら、そのワンちゃんに」が嬉しくて。

私にも、そんな日がくる？

また命を預かりたい、そんな風に私が思っているの？

送ってくれたのはお友達だけど

チョコにも背中を押されているような、そんな気がした。



チコちゃん。

あなたへの想いが強すぎて、まだ上手く想像できないけど
いつか来るのかな。

サクラamboのバンダナを巻いた

あなたの妹か弟と一緒に

9年間、二人で歩いたあの散歩道を

再び幸せな気持ちで歩く日が・・・。



「もう二度と、犬とは暮らさない」
「一生、チョコだけのお母さんでいよう」

チョコ。
あなたへの「愛情の証」として
そう心に決めていたけれど
それは間違いでした。
あなたは、そんな事を望んではいない。

あなたが私に教えてくれたのは
「別れの辛さ」ではなく
「共に生きる喜び」だから。

あなたが私の心に残したのは
「傷跡」ではなく
「たくさんの幸せ」なはずだから。



立ち止まりそうになるたびに背中を押してくれる
あなたの気配を感じる度に
お母さんは、そう思える様になってきました。

また、犬達と触れ合う日々を過ごしたい。
「我が子」と人生を共にしたい。
そう思うのはチョコ、あなたが心底愛おしかったからこそ
芽生えた気持ちです。

あなたの代わりを探すんじゃない。
私の中にいる、あなたの「心」と共に
新しい子を育ててみたい。

そして。
お迎えするなら「保護犬」を。

あなたが結んでくれた御縁から
色んな愛護イベントに参加しているうちに
お母さんは、いつからかそう思う様になっていました。

保護犬には、チカラがあると思う。
過酷な環境に負けず、生きようとするチカラ。
残酷な現実にもめげずに生き抜こうとするチカラ。

そして何より、自分たちを裏切り
死の淵まで追いやった「人間」という存在を
もう一度だけ信じてみようとする心の強さが。

私はそれを傍で感じてみたい。
そして相手が許してくれるのなら
共に「日常にある小さな幸せたち」を見付けていきたい。
一緒に、ゼロからのスタートをしたい。

チコ。
もし新しい子をお迎えることになったら
お母さんと一緒に育てて行ってね。

あなたの大きな温かな心で、その子を包んであげてね。



「いつかお迎えするなら、保護犬を」

そう思い始めた頃から私は、保護活動をされているボランティアさんや最寄りの動物愛護管理センターのHPをこまめにチェックする様になった。

純血種、雑種、子犬からシニア犬まで。

本当に色んなワンコが日々、收容されている。

みんな、どんな事情があってここにいるのだろう・・・。

お迎えする子を探すために閲覧しているのに

想いはつつい、他のところにいってしまう。

ある日、私はセンターのHPで

譲渡対象になっている子犬を見つけた。

「生後2か月、雑種のメス」という情報と共に

その子犬の画像が掲載されている。

・・・正直、可愛いとか好みだとかは思わなかった。

むしろ、目と鼻と口の周りだけ茶色なそのデザインが

「お面かぶっているみたい」だと笑ってしまった。



でも。

見た目だけでこんなに笑わせてくれるなら。

一緒に暮らしたら、もっともっと笑顔になれるかもしれない。

メチャクチャな理由だけど、何故か強くそう思えて

私は翌日、センターに面会に行くことに決めた。

その日の晩、布団に入った私は想像した。

お面をかぶったあの子と暮らす、新しい毎日を。

私の中では

「人生を共にする犬＝チコ」というイメージが

もう定着してしまっていて、違う子が自分の家にいる光景は

やっぱり上手く想像できなかつたけど

でも、それでもワクワクした。

未来を想像して、ワクワクする。

こんな気持ちは、チコを失って以来

はじめてだった。

一度は色を失った私の人生が

再び色付こうとしていた。



HPで見つけた「お面ちゃん」との
記念すべき初めましてに心を躍らせながら到着したセンター。

ちょっぴりドキドキしながら案内された犬舎は
想像よりずっと明るくきれいで、臭いもなかった。
職員さん達が日ごろからどれだけ丁寧にお掃除とお世話を
されているのかが、これだけでも分かる。

この子ですよと案内していただいた犬舎には
小さな子犬が、2匹いた。

茶色と白の毛色の子が、私が会いに来たお面ちゃん。
もう一匹は同時に捕獲された、兄弟だった。

中に入って、ご覧になって良いですよと
小さくカットされたオヤツを職員さんが手渡して下さったけど。
私は近寄ることも、手を伸ばす事もできなかった。

2匹が、私を見て怯えていたから。

できる限り私と距離を置こうと、犬舎の隅っこで
お互いを守る様に体を寄せ合い震える子犬たち。

「こっちに来ないで！」

「私達に触らないで！」

恐怖に引きつった表情でこっちを見ながら
必死に訴えるその姿に、私はショックを受けた。
自分が犬にとって「恐怖の対象」となっていることに。



これが、保護犬の現実なんだ。

保護犬は少なからず、心に傷を受けている。
頭では分かっていたつもりなのに
実際に見るのとはまるで違っていた。

しかも、この子達は山で生まれ、山で育った
「野犬の子」だった。
周りの全てを警戒することで自らの命を
守るという野犬の子。

母犬から「人間は恐ろしい物」だと教えられて育ったのに
生まれて初めて遭遇してしまった人間は
自分たちを追い回して捕獲し、母犬と無理に引き離した
センターの職員さんだったのだ。
どんなに怖かったことだろう・・・。

「捕獲する為には手荒な事もします。命を救う為です。」
職員さんがポツリと呟いた。

短い言葉に込められた、切ない想いと苦悩に
私も胸が苦しくなった。

命がけで育てた子を、目の前で奪われた母犬。
その母犬の悲痛な叫びを聞きながら「救うために」子犬を
必死に捕獲した職員さん達。
そして今、目の前にいるあまりに頼りない小さな二つの命。

誰も悪くない。
なのに、みんながこんなに傷付いている。

ただ浮かれ、ワクワクしていた私の浅はかな心は
みるみるうちに萎んでいった。

ここまでの傷を負った子を、私が育てる事ができるのか。
一生、心を開いてくれなかったら？懐いてくれなかったら？

「途中で飼うのをやめることは、あなた自身が殺す事と同じです」
「場合によっては飼わないでおくのも立派な愛情です」

今日、この子との面会前に渡された書類に記載してあった言葉。
厳しく聞こえるかもしれないけど、最初から放棄するつもりで
飼い始める人なんて誰もいない。

「中途半端な気持ちで命を迎えないで。引き返すなら今ですよ。」
そういう事なんだと思う。

私は犬を、チコの仲間を、殺したくなんかない。
絶対に。



犬舎の隅で震える、お面ちゃん



兄弟2匹で捕獲されていました。

職員さん達の努力で、兄弟犬も無事に巣立っていきました。

チコ。

お母さんは、あなたをどんなふうに育てたっけ。

マニュアル通りの子育てだった？

いつも100点満点のお母さんだった？

・・・違うよね。

あなただって最初から私に心を開いてくれていた訳じゃなかった。

引き裂かれた「母犬」を想い、泣いた夜だってあったよね。

だけど一緒に暮らすうちに、あなたは私を

「お母さん」と認めてくれた。

あなたは、特別な事なんて何も望まなかった。

ただ穏やかに私と生きる事だけを望んでくれた。

それは私に

「犬に対しての知識がある」とか

「育てる技術がある」からじゃないよね。

あなたの笑顔は、二人で重ねた

「心を通わせ合った時間」の賜物だった。

だから、今度だって焦らず

「あなたの人生を共に生きたい」

心からそう願えばいつか、あの子にも伝わるよね。

チコ。

あなたが私にくれた笑顔は

その信頼に満ちた瞳は

私が人生の中で持てた唯一の誇りです。

だからその誇りを心のお守りにして

あの子を迎えようと思うよ。



お迎えの当日、久々に再会した「お面ちゃん」は私の顔を見るなり、怯えて固まった。

私が手を伸ばしても、センターの職員さんの後ろに隠れてなかなか顔も見せてくれない。

無理に覗こうとすると、ビクッとして逃げてしまう。

そんなに私が怖い？

でも、今日から私があなたの「お母さん」になるのよ。

嫌だろうけど、受け入れたくないだろうけど、耐えて。

人間の家族にならなくちゃ、あなたは生きていけないのよ。

だから、その役割を私にちょうだい。

絶対に裏切らないから。

もうあなたが泣かなくも、震えなくとも良い様にせいはいばい守り抜くから。

祈る気持ちで子犬をクレートに入れ、車を発車させる。

向かうのは、我が家。

2016年1月20日。

私とこの子の、新しい生活がスタートした。



「ひな」という名前

センターからお迎えした子は

「ひな」と名付けられた。

名前は、私の実母につけてもらった。

本来なら「飼い主」である私が命名するべきかもしれないけど

私は敢えて、母に名づけをお願いした。

母が一番、チョコを失った事によるペットロス

引きづっていたから。

もちろん私や他の家族も、チョコを想って泣く日は

まだまだあるけど、時間の経過と共にその悲しみは

「泣き叫びたい様な狂おしいもの」から

「チョコへの愛おしさを再確認する穏やかなもの」に

変化していった。

けど母は未だに、チョコを想ってはタメ息をつき

「あの子は病気になって可哀想だった」と涙ぐむ日が続いていた。

それは母が弱いからではなく

ペットロスから抜け出すキッカケを作れなかったからだと思う。

私には有難いことに、沢山の「ワンコ繋がり友人」がいた。

だからそこで、チョコへの想いを泣きながらでも吐き出し

聞いてもらう事ができた。

そしてその度に「チョコたんは幸せだったよ」と

一番心が救われる言葉をかけてもらえた。

母にも勿論、優しい友人は沢山いるけど

やっぱり同じワンコ飼いの人とじゃないと

分かち合えない部分があったんじゃないかと私は思う。

「ずっと、チコだけのおばあちゃんになりたい」
きっと心のどこかでそう思い
それがチコへの「愛情の証」だと思い込んでいる母。

だからこそ、新しい子に自ら考えた名前を与え
その子と一歩踏み出して欲しい。
私はそう考えた。

「私は、チコの事が本当に可愛かった。
だからこそ、また犬をお迎えしたいと思えたんだよ。」

何度も母に言った言葉。
今は無理でも「ひな」との日々の中で
分かっていってくれたら良いなと思う。

ひなとの日々は、チコを忘れていくものではなく
あの子との思い出を、よりいっそう輝かせる日々であることを
感じていってくれたらと思う。



我が家にお迎えした当日と翌日、私がほんの少し留守にしていた間にひなはケージの天井を噛み破って脱走した。

幸いケガもなく、私が発見した時には家具の隙間に入り込んでブルブル震えていた。

ケージに戻そうと近寄ると唸りながら噛みついてくる。

ひなにとって、今の私は「敵」なのだ。母犬と引き裂かれ、震えていた自分にやっとできた「センター」という安心できる場所。そこで毎日お世話してくれた優しい職員さんによく心を開きかけたというのにその場所からも無下に引き離れた、得体のしれない敵。

しかも今は自分を「檻」に閉じ込めようとしている。

私がひなの立場でも、きっとそう思う。仕方のない事だと思う。

でも、ひな。
抜け出してどこに行くつもりだったの？
お母さんがいる、お山？
優しい職員さんがいる、センター？
あなたが帰る場所は、もうここしかないのよ。

私はただ「大丈夫よ」と声をかけながらケージを更に補強するしかなかった。これじゃ本当に、閉じ込めてるのと一緒だよねと涙がこぼれた。



この子の為にと用意したケージやクレートが
自分のエゴの塊のように思えた。

私は本当に、この子を幸せにできるのだろうか・・・。
挫けそうになるたびに私は、チコの写真を眺めた。

写真の中のチコは、生きる喜びに瞳を輝かせている。
信頼に満ちたまなざしで、私を見上げている。

このキラキラとした姿は、私と二人で築いたものだという事が
私の自信をかりうじて繋いでくれていた。

チコ。

どうか、力を貸してね。

お母さんと一緒に、ひなを見守ってね。

そして、ひな。

時間がかかってもいい。

どうしても無理なら、私を慕ってくれなくてもいい。

ただ「自分はヒトに愛されるべき存在なんだ」

ということに気付いて。

どうか、温かな場所で

ヒトと楽しく生きる事を諦めないで。

自分自身のために。



ひな、そんなに怖がらなくていいよ。
お母さんが作ったご飯、おいしいでしょ。
ふかふかのベッド、暖かいでしょ。
チコのお友達は、みんな優しいよ
チコが歩いた散歩道には
楽しい事が、いっぱいあるよ。
ひなが思うより
この世界は、優しくて温かい。

だいじょうぶ。一步ふみだして。
どうか、前に進んで。

私が残してきてしまった「お母さん」と一緒に
私がみちびく、この道を歩いて。



ゆっくり、ゆっくりと

お迎えした日から一週間、ひなは私に体を触れさせなかった。
クレートの奥で体を丸めたまま、目だけで私の姿を追う毎日。

ここが、どんな場所なのか。

私が、どういう人間なのか。

ひななりに、観察していたんだと思う。

名前を呼ぶと固まり、触れようとするとパニックになり逃げまわる。

そんなひなの様子が不安になった私は

保護犬の預かりボランティアをしている知人に、アドバイスをお願いした。

「今はただ、あなたが普通に生活している姿をその子に見せてあげて。

無理に構うことなく、お世話することだけ徹してみて。

その姿を見て、この人は悪い人間じゃないんだって

自分で理解してくれるから。気長に待ってあげて。」

その言葉のとおり、私は声をかけることもスキンシップをとることも

一切諦めて、ただお世話する事だけに専念した。

ひなが排せつすると、ペットシートを代え

時間がくると、食事をあげて

寒く感じる日は、毛布をそっとケージに入れた。

相変わらず警戒した目で私を見続けるひなを

怖がらせない様に、ゆっくりとした動作で

それらを毎日、繰り返した。

そんなある日

庭掃除をしていた私が窓の方に目をやると

ひなが立って、こちらを見ていた。

私を追って、ケージから出て来たらしい。



そっとガラスを開け「どうしたの？」と声をかけると
ひなは緩やかに尻尾を振り、そして
私の顔をペロッと舐めてくれた。

驚いてひなの顔を見ると
今までとは違う、とても穏やかな可愛い瞳で
私を見つめていた。

私は思わず泣いた。

ひなを驚かせない様に
両手で口をふさいで
声が出ない様にしながら、泣いた。



「この子は、保護犬です」

ひなが私に慣れてきてくれるのを待つて

私は近所への散歩を試みた。

色んなものに怯えるひながパニックを起こし

それが「逃走」等の事故につながらない様に

リードは首輪とハーネスの2本使いにした。

予想通りひなは、あらゆるものに怯えた。

遠くに見える人影、カサッと鳴るビニール袋

近寄ってくる車やバイク……。

その場を逃げ去ろうとするひなのハーネスを掴み

私は「大丈夫、お母さんがいるでしょ」と言い聞かせた。

それでもパニックが収まらない時は

道路にしゃがみ、ひなの体を抱きしめた。

それを何度も何度も繰り返すうちに

ひなのパニックは、だんだん軽くなっていった。

決して「ぜんぜん平気♪」には、ならなかったけど。

ご近所さんにも、いっぱい遭遇した。

チコのことを知っている方は

「あれ？またワンちゃんを迎えたの？」と訊いて下さった。

その度に私は、この子は愛護センターから譲渡していただいた

保護犬であること、野犬なので人馴れしてない旨を伝えた。

「少しずつ、慣れてくれるといいね」

「ひなちゃん、ゆっくり仲良しになろうね」

チコのご近所さんは、本当に優しい。

皆さん、ひなを温かく迎えて下さって

私は本当に嬉しかった。



「保護犬」と言うと、暗いイメージを持つ方も多いと聞く。
何か問題があるから、捨てられたんじゃないか
性格がひねくれ、もう懐かないんじゃないか等。

私は逆だった。

理不尽に与えられた過酷な境遇にめげず
いじける事もなく、生きる為に前に進んでいる
何事にも屈しない、強い心の持ち主たち。
そんなイメージしかなかった。

もし私が同じ境遇だったら、人間不信に陥って
二度と、人には心を開けないかもしれない。

この子達は、純で逞しい。

何があっても穢れなかった心は、本当に尊いと思う。

だから私は、誰に会ってもひなの事を
「この子は保護犬なんです」と紹介した。
何だか、誇らしい気さえした。

まだまだ外の世界に怯え、身を屈めながら
ちょこちょこ小走りしてしまうひな。
その姿は、あまりに頼りなく弱々しく見えるけど
お母さんは、知っているよ。

本当は、誰よりも強い心を持つてる子だって。

この世に生まれて、まだ数か月のあなた。
ここに来るまで、どれ程の寂しさや悲しみを
経験してきたことでしょう。

なのにあなたは負けなかった。
その子犬らしい無邪気な心を忘れずにいてくれた。
それが、どれだけ難しいことか。



ひな。

生まれた時から理不尽に辛い目に遭わされたおかげで
周りのもの全てに怯てしまうあなただけ
実は誰よりも強く、尊い存在なのよ。

だから大丈夫。

もっと自信を持って、胸を張って歩いてね。

お母さんはこれからも言い続ける。

「この子は、保護犬なんです」って。

とっても可愛いでしょ、という惚気と
あなたへの尊敬の意を込めて。



チョコが私と歩いたあの道を、ひなが楽しそうに歩いている。



チョコが大好きだったお庭を、走る喜びを知ったひなが駆け回る。



チョコと仲良しだったお友達が、子犬のひなと優しく遊んでくれる。



そんな楽しそうなひなの姿を、健やかな成長を
チョコと並んで眺める幸せ。

今、私が感じているのはそんな幸せ・・・。

もう一度、桜を

2014年の春。

私が見たのは、とても悲しい桜だった。

傍らには、冷たくなったチコ。

どんなに名前を呼んでも、体を撫でてでも

もう決して目を開けてはくれないチコを抱きながら

車の窓から見上げた、満開の桜。

それらに囲まれた山道を、ペット霊園に向かって走りながら

「もうじきこの愛おしい体を手放さなければならない」と言う辛い現実
に涙が止まらなかったのを覚えている。

だから私にとって桜は、チコとの別れを連想させる悲しいイメージで

もう一生、お花見をする事はないだろうと思っていた。

だけどチコが

私とその時間に留まっていることを望んでないのなら。

もう一度、見上げてみよう。

あの黄色いバンダナを首に巻いた、ひなと共に。

チコ、見えますか？

あなたの妹を抱き、桜を見上げるお母さんの姿が。



「できる事なら、このままあなたと共にいきたい。」

そんな気持ちで見た、2年前の桜。

今は「ありがとう」の気持ちで見ることが出来ます。

チコ、ありがとう。

この世に生まれ、お母さんと出会ってくれて。

最期の時も、私の腕の中で旅立ってくれたあなたは
最高に親孝行な、自慢の子だよ。

美しく咲き誇る桜越しに
大きく手を振ってみた。

遠いお空の上のあなたから、きっと見えているはずだと信じて。



私の愛おしい、二人の子達へ

ひな。

今はまだ幼くあどけない、あなたただけど
共に過ごす時間を重ねるごとに、どんどん大人になり
そのうちお母さんの年齢を超えてしまう。

そしていつか、チコと同じように
お母さんの手が届かない場所へ行ってしまう。

たとえずっと先の事であっても、その時は必ずくる。

お母さんは、また苦しむでしょう。
声が嘎れるくらい、泣き叫ぶでしょう。
心だってまた、醜くなるかもしれない。

でも、お母さんは立ち上がってみせる。
歯を食いしばってでも、また前に進んでみせる。
そう断言できる。

種別が異なり

「言葉」も交わせない私たちが
心を通わせ、愛し愛され

お互いが、お互いの「全て」になって。

こんなに素晴らしい関係を築けた喜びが
「別れの辛さ」なんかに負けるはずがないと
お母さんは知っているから。



チコ、ひな。

私があなた達を育てたつもりでいたけれど
こうして振り返ると、違ったね。

お母さんの方が、あなた達に守られ、支えられ
そして色々な事を教えてもらっていたんだね。

信頼に満ちた瞳で見上げられる喜びを教えてくれた、チコ。
その喜びを得ることの貴重さを教えてくれた、ひな。

二人とも、
ありがとう。

この世にいることを許された
けして長くはない時間の全てを
私に委ねてくれて、ありがとう。

あなた達の人生を
共に歩ませてくれて、ありがとう。
二人の「お母さん」になれて
私は本当に本当に幸せです。



花が咲く、その先に

これからも、私は私の道を歩いて行く。
足元を照らしてくれる、綺麗な花々に導かれながら。

どんなに寂しくても、悲しい事があっても
私はその花を見る度に、元気になれる。
前を向いて、迷わず進んでいける。

そして、ずっと先のいつか
「私の道」を歩き切った時。
美しく咲く花の、その先に見えるのは・・・

ひとときも心から消える事のなかった
愛おしい愛おしい私の子達の姿。

あなた達がいる。

あなた達はきっと、とびきりの笑顔で駆け寄って来てくれる。
私に向かって、まっすぐに。

私は両手を広げ、その体を受け止める。
そして力いっぱい抱きしめる。

いつか夢でみた、雪の日のように。
草花いっぱいの野原で、一緒に倒れたあの日のように。



あなた達をもう二度と離さないように抱きしめたら
耳元でこう告げたい。

お花、綺麗だったよ。
ありがとう、とっても素敵な道だった。

お母さんはもう二度と、あなた達を離さない。
これからは、ずっと一緒よ。

永い間、待っててくれてありがとう。
良い子ね。
大好きよ。



おわりに

溢れる想いのまま綴った拙い文章を
最後までお読み下さって、ありがとうございます。

チコの旅立ちから一年後の2015年に出版した電子書籍
「これからの永遠」にはチコとの思い出と
チコが旅立った後の私の想いを主に書かせていただきました。

あれから更に1年。
私の横には「ひな」という新しい家族がいます。
自分でも全く予想してなかった環境の変化です。

「どうしてまた命を預かる気になれたの？」
そう訊かれる事が多いのですが
「理由」として言葉にするのは、とても難しくて。

なので、この本1冊に書いてみました。
長〜い理由でしょう。笑
それくらい、色んな出来事や想いが重なって
生まれた心境の変化だったと思います。

ペットロスは苦しい。
そう予想していても、どんなに覚悟していても
実際に経験するのとは、まるで違いました。

自分の人生まで終わってしまった様な気がしたし
チコがない世界で自分が生きていく意味が
全く見出せない毎日でした。

だけど、チコを失った苦しみから救ってくれたのも
またチコだったのです。



チコが残してくれた、沢山の思い出。
悲しみを分かち合ってくれる、優しい友人たち。
そして、チコの亡き後も私を見ると嬉しそうに
駆け寄ってくれる、可愛いワンコ友達。

愛するチコに、ここまで「立ち直るキッカケ」を
用意されていては、もう前に進むしかありませんでした。

チコが特別なものではありません。
全てのワンコさん達が
大好きなパパやママに立ち直るキッカケ、
この本で言う「道を照らす花」を残して旅立ちます。

「その花に導かれ歩いてきたパパやママと、再び出会えますように。」
そう願って。



だから、気付いてあげてください。

その花に。

気付いたら、歩いてあげてください。

あの子達が導く、道を。

そしていつか出会いがあり、状況が許せば
新しい「命」を迎えていただきたいと思います。

旅立った子の代わりではありません。

あの子達と共に命を育むのです。

あの子達が、その生涯をかけて教えてくれた
「犬を愛する心」と共に。

私はひなを迎えて、ますますチョコを愛おしく想い
以前より近くに感じる様になりました。

以前、感じていた

「ほかの子を可愛がるのはチョコが可哀想だ」という気持ちは
今は全くありません。

本当に可哀想なのは「存在を忘れられる事」だから。

いつもチョコを近くに感じるひなとの生活は
私にとってもチョコにとっても幸せなものだと
思っています。

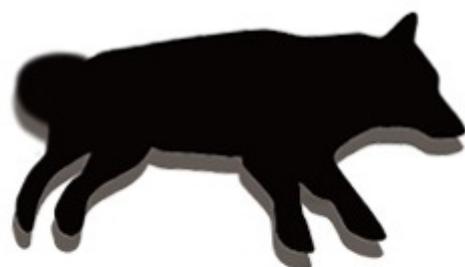
無償の愛を与え続けてくれた、お空の子たち。

その子達をめいっぱい愛した皆様。

そして、今また新たに生まれる小さな命たち。

全てが温かく繋がり、大きな幸せとなりますように。

心から、願っております。



●保護犬とは

飼育放棄や、迷子になってしまった等の理由から
飼い主がおらず、動物愛護センター等に一時的に保護されている犬のこと。

●動物愛護センターとは

犬猫の引取りや保管・処置（返還・譲渡・殺処分）
犬に対する苦情受付・相談窓口、また動物愛護啓発活動などの為に
自治体が設けている施設です。

その活動内容は各自治体によって異なります。

ひなを譲り受けた福岡東部動物愛護管理センターでは・・・

- ・センター見学・モデル犬との触れ合い（※モデル犬は可愛い元収容犬！）
- ・ハローアニマル開催（※子供さんを対象とする動物愛護の授業です）

等の啓発活動が行われています。



他にも、こんなに楽しいことも！

- ・月に一度の「わんにゃんよかイベント」

※行政・ボランティア・動物関係の専門学校生で提携して開催

内容は獣医師による健康相談、譲渡相談、悩み相談などなど・・・

- ・施設内「ふれあい広場」の解放



・あにまるぼーと卒業犬同窓会



同窓会はひなも参加させていただきました。

怖がりの為、まだゲーム等には参加できませんでしたが
社会化のための良い経験になったと思っています。

先輩保護犬&飼い主さんとの交流は、私自身にとっても貴重なものになりました。

今はお友達と一緒に「ふれあい広場」を楽しく活用させていただいています。

私達が、気軽に楽しい気持ちでセンターに足を運ぶことが

保護犬達のイメージを変えるキッカケの一つになるのかもしれない。

ひなは収容されている間に、ワクチン接種や皮膚病の治療を受けていました。

不潔な環境で生まれ育ち、ボロボロだった野犬の子が

職員さん達の手厚いお世話によって「可愛くて健康な子犬」になる事ができたのです。

私を見て怯え震えていたひなですが、職員さんの前ではオテやオスワリも

出来る様になっていました。どれだけ愛情をかけて下さったのかが分かります。

現在、福岡市東部動物愛護管理センターは「ここから沢山の子が巣立って

行けますように」との願いを込めて「あにまるぼーと」という名称で呼ばれています。

一部画像：福岡市東部動物愛護管理センターHPより引用

●預かりボランティアとは

保護された犬を一時的に預かって下さるボランティアさんです。

愛護センター等と提携している場合もあります。

犬達は預かり宅で一般の「家庭犬」と同じ暮らしを送る事になります。

優しいボランティアさんの元で沢山の事を学びながら

新しい家族のお迎えを待っているのです。



今日からここで暮らすの？



最初はドキドキしちゃう・・・



ベッドって気持ちいいんだね♪



譲渡会にて。
家族って温かいものなんだって
お勉強したよ。

早く僕たちにも「本当の家族」が現れますように。

『私達はそれぞれが家庭や仕事を持つ中、家族の理解と協力を得ながら
自分でお世話できる頭数の犬猫を自宅で保護し、新しい家族探しをしています。
殺処分が一頭でも減ること。

犬猫レスキューなんて必要のない世の中にする事。

それがメンバー全員の願いです。

一人一人のチカラは小さなものかもしれませんが。

それでも皆でチカラを合わせて願いが叶う日まで頑張ります。

数千分の1の奇跡の確率で殺処分を免れた保護犬たちの命のバトンを
どうか受け取って下さい』

写真・文章提供：To save the precious life TEAM-A

<http://www.team-a.info/>

「何とか生きようとする小さな命」と

「どうにか生かせようと奮闘する人々」。

このふたつの懸命な姿を見た時に

「迎えるなら保護犬を」という選択肢が自然に芽生えるのかもしれませんが。



TEAM-Aさんを卒業していった、元保護犬達。

家族からの最初のプレゼントである「名前」をもらって幸せに暮らしています。

チコはペットショップで購入した子です。

チコと出会えた事は、私の人生の中でも最大と言えるくらいの宝物で
そのこと自体には罪悪感も、ましてや後悔なんてありません。

チコを我が子として迎え、全力で愛し、最期の瞬間まで看取った自分はその小さな命を尊び、守り抜いたと断言できるからです。

なのになぜ、次の子も同じ様にショップで迎えなかったのか。

それは、その必要性を全く感じなかったからです。

ショップで売られている子も保護犬も。

家族に出会うまでの過程が異なるだけで

その命にも魂にも何ら変わりはありません。

チコが結んでくれた御縁の中でその事を学んだ私は
自然と「保護犬の迎え入れ」を選んでいました。

そして今、その選択は間違っていなかった。

心からそう思う毎日です。

「新しい家族はペットショップではなく保護犬から。」

愛護という観点からだけではなく

「すごい可愛いよ、最高だよ！」という理由でも
私は周りの方にお勧めしたい。そう思っています。



ひなは保護犬の中でも特に警戒心が強いと言われる「野犬の子」でしたが、私が出会った「保護犬さん」には色んな子達がありました。

同じセンター出身でも「元飼い犬」の子はとても人懐こいのであぁ、人に可愛がられた経験があるんだなと、すぐに分かります。犬舎を訪れた私を見ると「だれ？だれ？」と興味津々で寄ってきてお顔も穏やかに見えました。

中には状況からかビクビクしている子もいましたがひなの様な「人なんて信じない！」という顔とは違って見えました。

センター等から引き出され、預かりボランティアさんの元で「家庭犬」としての暮らしをしながら、新しい家族を待っている子達もいます。ボランティアさん達は保護している子の様子を伝えようとブログ等を運営しているケースが多いので、その子の普段の様子をネットを通じて知ることができます。

「保護犬」というと、何だか暗い「中古」のイメージがあるそうですが逆に言えばそれが「ショップで子犬を迎える」よりも良い点だったりするのです。

センターの職員さんも、預かりボランティアさんもその子と毎日接しながらお世話しているのでおおまかな性格や傾向を把握してらっしゃいます。(センターについては自治体で大きな違いがあるかもですが・・・)

とくにボランティアさんは家庭内で一緒に生活しながらその子の様子を見てらっしゃるのでこんな物を食べたら便が緩くなる、とか宅配便が来たら異常に興奮してしまうとか、そういう生活上での細かい注意点も、里親さんに教えて下さいます。

これは、新たに犬を迎える側にとっては凄く貴重な情報ですよ！

日々、心と時間を消耗しながら活動してらっしゃるボランティアさんに甘える訳ではないのですが、そういうプラスな面も大いにあるのです。意外に知られてない事なので、敢えて書かせていただきました。

ひなが野犬の子で

「人に懐くまでに時間がかかる」ことも

「捕獲時に酷い皮膚病があった」ことも、センターの職員さんは包み隠さず私に教えて下さいました。

時間をかけてあげれば、いつか必ず心を開いてくれるであろうことも。

それでも私が、既に人馴れしている元飼い犬の子ではなく

野犬のひなを迎えたのは、どこか自分と重なる部分を感じたからかもしれません。

チョコを失った私と、ヒトという存在を拒絶しているこの子。

どちらもゼロどころかマイナスからのスタートだけど

だからこそ共に幸せを見付けていきたい。

この子となら、それが出来るかもしれない。

そう思えたのです。



実際に生活してみると想像以上に難しい面もあったけど
でもその何百倍も（！）大きな幸せをひなは私にくれました。

私の姿を見るだけで怯えていたあの子が
今は私の目をしっかり見つめながら尻尾を振ってくれます。

体に触れようとするとうみついてきたあの子が
「撫でて」と小さな体を寄せてきてくれます。

クレートの奥で体を丸め震えていたあの子が
今は元気よく、お庭を走り回っています。

「ひな」

そう呼ぶと嬉しそうに駆け寄って来てくれる体を抱きしめる度
「やっぱり、この子で良かった」そう思う私です。

命がけでひなを産み、育ててくれた山のお母さんと
「その命を救うために」と必死に捕獲して下さったセンターの職員さん。

こんなにも大きな幸せを、生きる喜びを
寄り添ってくれる確かな温もりを
私に授けて下さって、ありがとうございます。

そう感謝しながら、充実した毎日を送っている私です。

元保護犬・ひなと共に
お空のチコに見守られながら。



著者：チコママ&ぺろまま



お知らせ

ぺろまま&チコママの初個展が開催されます。

個展では「花が咲く、その先に」と、その続編が展示されます。

個展でしか見れない作品をたくさんご覧いただけますのでみなさん是非足をお運びくださいね！

日程：2016年11月23日（祝）～27日（日） 11時～19時

※日程の前半と後半で内容が変わります。

23日（祝）24日（木）は ぺろまま&チコママ「花が咲く、その先に」

25日（金）～27（日）は ぺろまま「しあわせの階段」

「しあわせの階段」のテーマは「殺処分されてしまった命」です。

個展では残酷な写真や絵などなく、笑顔になれる内容になっておりますので小さなお子様でも安心してご来場いただけます。

場所：Cafe&Gallery Roomer ※小田急線祖師谷大蔵より徒歩5分

住所：〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷1-34-5

H P： <http://www.roomer.jp>

